

## 江戸末期より受け継がれる漆芸の蒔絵技術。 大阪芸大生との共創に新たな可能性に期待。

秀吉が初めて城持ち大名となった長浜の地に400年以上続く「長浜曳山まつり」。2016年12月にはユネスコ無形文化遺産に登録され、伝統文化の重要性が認知されました。豪華絢爛な曳山の装飾に欠かせないものが仏壇などの装飾にも使われる彫金や漆芸です。今回は長浜で江戸末期から蒔絵技術を継承している4代目「蒔治」の下司貴之さんに、大阪芸術大学の学生と黒壁のガラス事業とのコラボレーション事業についてお話を伺いました。

聞き手／株式会社黒壁  
広報担当 北村 馨

- 北村 まず最初に、漆との出会いのきっかけについて教えてください。  
下司 出会いというよりうちは家業で代々続いておりまして、僕で4代目になります。明治末期からここ、朝日町の八幡町で蒔治をしております。蒔絵師という形で、仏壇に絵を描いております。蒔絵というのは砂絵みたいな感じで、のりの代わりに漆を使うと絵がでるといふものです。大学の方は嵯峨美術短期大学の日本画専攻を卒業しまして、そこから3代目鈴木表朔先生に7年間ほど師事して学び、今に至ります。
- 北村 ありがとうございます。漆を使った絵の特徴というのは何かありますか？  
下司 漆というのは基本的に合金と呼ばれています。おそらく皆さんが良く見ているものは平というものだと思います。書いて蒔くだけ。それと、漆をかけて砥ぎあげるといふ手法があります。大まかにはそういうのがあって、手法としてはいろんなやり方があり、グレードに応じて槍差をかけるという形になっています。
- 北村 今度は、下司さん個人の作風について教えてください。  
下司 元々僕はお茶道具専門なので、道具の仕事を主にさせてもらってます。それを主にして、美術館関係の仕事もさせていただいています。
- 北村 今回この曳山の漆ガラスということでご協力して頂けるということですが、今回の事業への思いをお願いします。  
下司 そうですね、今回曳山のユネスコ推進ということで選定されましたが、ものを作るアプローチとしては第1弾になるんじゃないかな。どういう形になるかはこれから作っていくということになるんですけど、自分もちょうど昨年に曳山の修繕認定いただきました。



- 北村 認定のためには何が必要なんですか？技術とかですか？  
下司 技術もそうですが、屋台の連合会というのがあって、そこからの斡旋で承認をもらう必要があります。今、長浜曳山まつりでは僕を入れて3人の認定者がいます。その曳山まつりとしての第1弾みたいな形になると思うので、どのような形でつくっていきけるかというのがこれからのことになってきます。
- 北村 今回この曳山のデザインを学生たちがするという事なんですが、デザインについて何か楽しみとかそういったものはありますか？  
下司 どういうコンセプトで持ってくるかというところが楽しみです。というのも、祭りをしている人間が作るのと、新しい目で違った視点で見るといふのは非常に面白いだろうなと思います。もぐりこんでしまうと自分だけの気持ちだけで作ってしまい、無垢な気持ちで見られない、違う角度で見られないといふのがあるので、彼らがどういったアプローチでやってくるのか、学生らしいデザインが欲しいなと思います。売り込まないといけないうえに、おもしろい発想で物を作ってもらいたいなと思っ

います。

外から来るということは、全く違った視点で全く見たことが無いという気持ちで作ってもらいたいと思います。

- 北村 ありがとうございます。  
下司 ありがとうございました。

(つづく)

